

1 はじめに

今回は、オープンした唐古・鍵遺跡史跡公園とリニューアルした唐古・鍵考古学ミュージアムを訪れます。その前に、唐古・鍵遺跡から北西3kmの距離にある平等坊岩室遺跡を訪れ、近接する大規模集落を比較し、唐古・鍵遺跡を再確認したいと考えています。また、唐古・鍵遺跡周辺の後期段階を中心とした集落遺構も確認します。詳細は、当日ということで、以下、訪問予定の遺跡を簡単にご報告します。

なお、今回訪問する遺跡は、7年前に訪れた遺跡がありますが、時間も過ぎていますし、新たな見方ができるかと思えます。

2 前栽遺跡

最初に訪れる前栽遺跡は、標高55mの旧布留川が形成した扇状地に位置し、東から西に扇状地特有のふくらみを持った傾斜地に立地しています。遺跡からは、縄文時代晩期を中心に土器が多数出土し、橿原遺跡・曲川遺跡・竹之内遺跡などとともに奈良県を代表する縄文期の遺跡です。近年は遺跡南西端の自然流路から、弥生前期から後期にかけての土器が出土し、付近に弥生期の集落が想定されています。一方、遺跡西側から弥生中期初頭の方形周溝墓が5基検出されていて、その内4基は溝を共有しています。弥生期の奈良盆地では単体型の埋葬主体が多いのですが、周溝の共有は血縁関係を有した墳墓群であることを示しています。この墓域は、平等坊岩室遺跡との関連が指摘されていますが、前栽遺跡との関わりも考えられます。また、北西1.5kmほどに位置し、弥生中期を中心に多数の方形周溝墓(溝を共有する群構成)が検出された八条北遺跡との関連も気になります。

3 平等坊岩室遺跡

前栽遺跡より西南500mに平等坊岩室遺跡があります。沖積地形の唐古・鍵遺跡と異なり旧布留川が形成した扇状地端部に立地し標高は52~54mです。東西250m南北600mの10000㎡の居住域を含む東西400m南北600mの範囲の大規模集落で、弥生前期より古墳期前期まで継続する遺跡です。弥生前期前半に集落域が形成され、前期後半には本格的に環濠が掘削され中期前半には唐古・鍵遺跡よりも早く環濠集落が形成されています。集落の周囲には自然河道(北東→南西)が検出されその内側に環濠が確認されていて、排水機能を重視した環濠といえます。なお、集落内最高所の微高地では後期後半の方形区画(一辺30m)の溝が検出され、環濠内の中心施設とされています。方形区画は、弥生後期から終末期にかけて兵庫県加茂遺跡や滋賀県伊勢遺跡など畿内でも検出例があり、首長層の居館の萌芽とし階層分化の指標とする意見もあります。平等坊岩室遺跡では、方形区画の内部の発掘がなされておらずその実態は不明です。



また、遺跡南側の微高地から北に向かって緩やかに落ちていく地形を利用した畦畔状の高まり(幅40~50cm高さ5~10cm程度：上遺構写真：調査報告書)が数条検出されています。中央に溝(水口状施設)が掘られ、同時に出土した土器は、前期後半を示しています。今回訪れる阪手東遺跡で検出された畦畔状の遺構との比較から奈良盆地の弥生期の水田経営を確認したいと思います。

平等坊岩室遺跡は搬入土器の出土量が多く、さらに銅釧や板状鉄斧や松菊里土器など重要な遺物も多く出土しています。

次に立ち寄る稲葉遺跡(中期後半の遺物出土)と嘉幡遺跡(前期末・中期後半・古墳前期の遺物包含

層・集落遺跡)からは、幅20m以上の旧流路が検出され、平等坊岩室遺跡に連なるとされています。

また、布留川南流と大和川との合流地点の吉田遺跡を遠望します、吉田池周辺の遺跡ですが、従来空白地帯とされていたエリアです。弥生前期の遺構(溝・小溝・ピット群)が確認され、弥生後期から終末期にかけての土器が出土しています。清水風遺跡や法貴寺北遺跡から1kmほどの距離にあります。

4 周辺遺跡

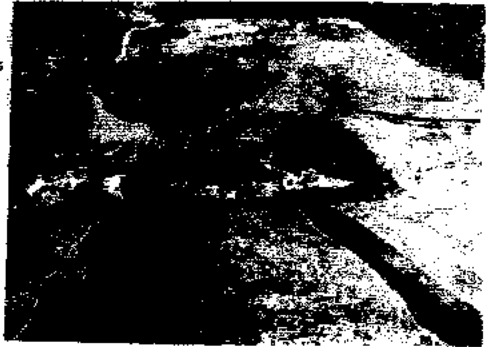
唐古・鍵遺跡及び清水風遺跡は、「からこかぎ」別稿を参照いただき、今回訪問する周辺遺跡の概略を紹介します。

遠望となりますが、下永東城(ひがしんじょ)遺跡と下永東方(ひがしほう)遺跡は、前々回の弥生ウォークで訪れた庵治遺跡の北東に位置します。下永東城遺跡は中期前半の方形周溝墓が、下永東方遺跡は前期の自然流路と法貴寺北遺跡と同時期(後期末～庄内期)の方形周溝墓が検出されています。特に、庄内期の方形周溝墓が三河遺跡・伴堂東遺跡・下永東方遺跡などで連続しており、付近での集落遺構の存在が予想されます。

唐古・鍵遺跡史跡公園などから遠望するのが海知遺跡です。旧海軍飛行場の跡地にあり、東方2kmに唐古・鍵遺跡があります。既に、飛行場建設の過程で弥生前期遺構が確認されていましたが、その後、海知遺跡からは前期中葉～中期初頭の多数の土器や結晶片岩の石包丁の未成品、また多くの土坑や溝・落込みが検出され前期段階の集落遺跡であることが判明しています。

遺跡東側には、自然河道が検出されています。また、早い時期での河内・紀ノ川流域からの搬入土器も複数出土しています。

唐古・鍵遺跡から南東2kmの東井上(いね)遺跡は、戦前には既に前期土器を含む遺物包含層が確認されていましたが、その後、中期土器や後期の竪穴住居を含む遺構群が検出されています。また、同じく遠望ですが、唐古・鍵遺跡から南2kmにある阪手遺跡からは、水田遺構は検出されていませんが弥生後期の



井堰(しがらみ)が検出され、井堰を中心に、南北・北西・南東方向に浅い溝(上写真:堰と溝遺構:県調査報告書)が検出され、微高地形を利用した後期の水田遺構とされています。

昼食後に訪れる小阪里中遺跡は、唐古・鍵遺跡より南に500mに位置し、後期の溝・土坑が複数検出され中期後半の甕棺墓と推定される土坑も検出されています。後期を中心に小規模の集落活動が想定され、この時期の小規模な集落活動は、唐古・鍵遺跡の周辺で確認されます。

最後に、唐古・鍵遺跡より南600mに位置する法貴寺斎宮前遺跡と小阪榎木遺跡と小阪細長遺跡を経て阪手東遺跡に到達します。法貴寺斎宮前遺跡と小阪榎木遺跡は、農業管水路改修工事(東西延長630m)に伴う調査で、前者からは中期後半の大溝や方形周溝墓、後者は後期から庄内期に及ぶ多数の溝や土坑が検出されています。さらに、南400mに位置する阪手東遺跡からは、中期中葉の大型の方形周溝墓(14×16m)を含む16基がまとめて検出され、その上層(明褐色粘質土)から終末期～古墳期初頭の畦畔状遺構が足跡とともに検出されています。法貴寺斎宮前遺跡と小阪榎木遺跡と阪手東遺跡は、中期中頃から継続する集落域・墓域・生産域を有する一体遺跡の可能性がります。

(編集委員)

東 治雄 井上知章 植田洋高 谷口敬子 福島道昭 藤原隆雄 万徳順一 宮川真由美